



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 1999, 9904s: 656-663

ISSUE DATE:

1999-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196580>

RIGHT:



# 京大広報

(号外)

1999 4

## 目次

### 卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば	657
修士学位授与式における総長のことば	659
博士学位授与式における総長のことば	660

### 大学の動き

平成10年度卒業式	662
平成10年度修士学位授与式	662
博士学位授与式	662

### 医療技術短期大学部の動き

平成10年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式	663
----------------------------	-----



平成10年度卒業式

## 卒業式・学位授与式

### 卒業式における総長のことば

平成11年 3月24日

総長 長 尾 真

本日ここに元総長をはじめ名誉教授の先生方をお迎えし、平成10年度の卒業式を行いますことは、私ども京都大学の全教職員にとりまして大きな喜びとするところであります。2,709名の卒業生の諸君、まことにめでとうございます。心からお慶びを申し上げます。

諸君の多くが京都大学へ入学した年は戦後50年にあたる1995年でしたが、この年には阪神淡路大震災が1月にあり、地下鉄サリン事件など社会を震撼させる事件がいろいろと起こった年でありました。また一方では円の交換レートが79円という史上最高を記録した年でもあったわけであります。それ以来今日までの4年間、日本経済が急速に悪化するとともに、多くの凶悪犯罪が出てくるなど社会全体が暗い時代に入ってきております。

このような困難な時代に学生生活を送った諸君は京都大学において何を学びとってくれたでしょうか。困難な時代になればなるほど、唯一頼れるものは諸君の頭の中に蓄積して来た知識と判断力、そして諸君の持つべき勇氣であります。諸君は、気持ちを引き締め、よく勉強し、社会の深層で起こっている事柄をよく観察し、真剣に物事を考えながら学生生活を送ったことと思います。困難な時代は人を鍛えます。不透明な時代であればあるほど人は真剣に物事を考えるからでしょう。

考えてみますと、我々はあまりにも予定され、スケジュール化された世界に馴れすぎてしまったのではないのでしょうか。例えばいわゆるパック旅行の場合を考えてみればそれがよく分かります。国内旅行でも海外旅行の場合でも、日程はきっちりと組まれます。何月何日には朝何時に起きて何時に出発といったことはもちろんのこと、空港や市内のホテル、見物や散歩をする所など、観光案内書や地図が全て用意されていて、なにもかもあらかじめ決められている訳です。

昔はそんなことはほとんどありませんでした。例えば、芭蕉の奥の細道の旅にはほとんどスケジュールがなく、野宿同然の夜も過し、身の危険を感じながら、わずかに次の宿の名前だけを頼りに旅をした



のであります。その代わり想像もしない風景に出合い、心からの驚きを覚え、他人の情けをしみじみと味わい、その心を俳句に読むことが出来たのでありましょう。

このような状況をみますと、現代は旅行本来の姿を見失ってしまっていると言えるでしょう。これは単に旅行の場合だけの話ではありません。人の一生についてもそうであります。あまりにも知識と情報が過剰であり、未来があまりにもスケジュール化されすぎてしまっております。これは考えてみれば異常なことでもあります。

あまりにもスケジュール化されすぎた旅においては、新しい発見、新しい経験というものはありません。あらかじめ憶えていたことを現場において確認するということがせいぜい出来ることであります。未知の世界に立ち向かうという緊張感や、新しい発見という驚きはほとんどない旅行や人生となってしまうのであります。これは人間の感覚を鈍らせます。また未知の旅へ出るときの不安感、そして必要とされる勇氣と冒険心、そういったものが全くない旅であり、人生となってしまいます。

旅行の本来の姿は、未知の世界に入り、未知との遭遇によって、先入観なくつぶさに観察し、考え行動し、人情を知り、それを通じて社会から多くのことを学ぶことにあったはずであります。今日はそれを失ってしまっておりますし、またこのような世界に対して疑いも抱かない時代となっているのであります。いやむしろ逆に、将来がスケジュール化されていない不透明な未来という状況に対しては過度の恐怖を抱き、そういった世界を拒否する態度さえ取

るようになっていきます。これは個人の場合だけでなく、企業や社会そのものも、そのような考え方になっているのであります。そこで、ますます詳細な調査をし、知識を蓄え、将来をできるだけよく予測することによって、この恐怖を逃れようとしています。

学問が進み、情報技術が発達し、膨大な知識が蓄積されたからといって、本当に未来が確実に予測でき、自分の人生をスケジュール的に進展させてゆくことができるのでしょうか。そんなことがないことは誰の目にも明らかであります。世の中一寸先は闇であり、何が起こるか分からないのであり、諸君の人生は波瀾万丈なのであります。阪神淡路大震災はこれを如実に、痛いほど我々に示してくれたのであります。

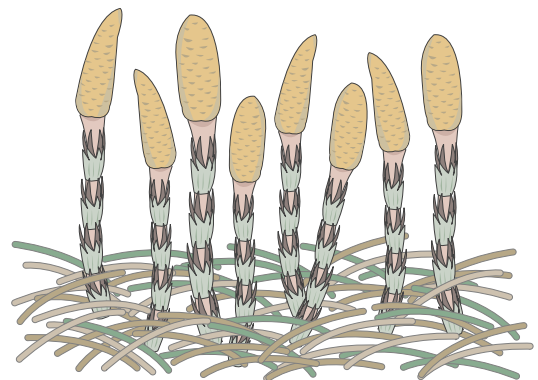
我々はしかし、そんなことで甘んじていてよいはずはありません。このような混乱の時代においてこそ、諸君のような未来を担っていく人達がしっかりとした考え方を持ち、自信をもって進んでゆくべきであります。何が起こるか分からない時代に予めスケジュールを立てることはできず、どのような対処の仕方をしたらよいかということは分かりません。唯一頼れるのは諸君が学んだ学問、身につけた教養であります。これが諸君の持つべき自信の基礎となるものであります。

前例のない状況に対しては、自分の持つ知識と思考力・判断力に頼らざるをえず、波瀾万丈の時代には、遭遇するもの全てについて、虚心坦懐に観察し、真剣勝負で立ち向かわねばなりません。これはいわば人間力とでもいうべき全人格の力であり、諸君はその基礎を京都大学の教室において学びとり、スポーツやクラブ活動において鍛錬したはずであります。あとはよく考え、勇気をもって発言し、実行することでありましょう。

21世紀がグローバル化の時代となることは間違いありません。国境という壁はますます低くなり、日本も、そこに生きる諸君も世界から孤立して生きてゆくことはできず、世界の諸国とその人達とともに生きてゆかねばなりません。こうした時代に、自分の考え方と立場をしっかりと持ち、客観的にみて妥当であると考えたことを明確に発言し、他人に納得してもらい、お互いに協力して実行してゆくことが必要であります。諸君はこれが間違いなく出来る

人達であると信じます。

社会は諸君を鍛えるべく待っているのであります。諸君はむしろそれを感謝し、社会に教えられ、社会とともに生き、社会を少しでも良くするように努力しなければなりません。阪神淡路大震災をはじめとする社会の激動を経験し、京都大学ですぐれた学問を学び、自ら考え行動する学生生活を送った諸君は、きっとこの期待に応えてくれるものと思います。21世紀という未知で不透明ではありますが、人類にとって大きな可能性を秘めた時代に、自信と勇気をもって出発していってくれると信じております。これをもって諸君の門出に対する私のはなむけの言葉といたします。卒業おめでとうございます。





## 修士学位授与式における総長のことば

平成11年 3月23日

総長 長 尾 真

ただ今修士の学位を得られた1,814名の皆さん、おめでとうございます。ご列席の名誉教授及び教職員の皆様方とともに、心よりお慶びを申し上げます。

諸君は修士課程の2年間に於いて、ほんとうの意味で物事を自分で考え、自分で自分の設定した課題に対して挑戦し、それを解決したという貴重な体験をしたわけであります。この2年間の研究を通じて諸君は物の見方、考え方ということについて十分に訓練されたのではないかと思います。

諸君が出て行く社会は現在混迷に陥っていて、将来は不透明であります。こういった時にこそ諸君が修士課程を通じて培った物の見方、考え方が大切となるのであります。

物の見方は何重にも積み重なった重層性をなしていると考えられます。

一つは、事実を知ることであります。これは当然のことではありますが、事実をできるだけ詳細に正しい情報として得ることが大切であります。

二つ目は、この事実の意味を知ることであります。どう解釈したらよいかということであります。自然科学の場合にはどういう法則によってこれが解釈できるかということになるでしょう。人文社会科学の場合にははるかに複雑で困難であります。どういう立場から見るかは人によって全く異なることがしばしばであり、これはその人の人生観にも関係するでしょう。

三つ目は、それはその事実がどうして得られたか、どのチャンネルを通していつもたらされたかということであります。これによってその事実なるものがどういうものであるのかを評価されることになるからであります。自然科学の場合には、どういう条件で観測して得られたデータであるかといったことになるでしょう。一般社会における出来事の場合には、いつ誰によって知らされたかということが特に重要になります。そういった事をよく吟味して、もう一度事実を知ることにもどって、独自に事実の確認をしたり、新しい事実を探す努力をしなければならなくなるわけであります。

そして最後として、そういった事実が出て来た背

景、あるいは時代状況というものを考えることが必要でありましょう。

例えば、今日日本経済はどん底にあり、消費の拡大が必要であるとして政府は地域振興券（期限付き商品券）なるものまで配る涙ぐましい努力をしております。たとえ消費の拡大が必要であるとしても、しかし高齢化社会、地球環境問題や食糧問題、エネルギー問題などが解決の困難な問題として横たわっていることが明らかな今日、そういった事を十分に視野に入れた上での経済活動、消費構造、生活様式ということを考えねばならないのであります。その例としてデンマークを上げることが出来ます。

国民経済の成長は必然的にエネルギー消費の増加をもたらす、という神話に立ち向かい、エネルギー消費の総量を増やすことなく17年間にGDP（国内総生産）を1.4倍に成長させました。第一次石油危機に直撃されたエネルギー弱小国デンマークはそれを機にエネルギー自給圏の形成に向けて国民運動を起こし、風力発電をはじめとし、太陽光、太陽熱、バイオマスに至るあらゆる再生可能エネルギーを追求し、化石燃料にも原子力にもよらずにエネルギー自給率の高度化を実現し、新しいエネルギー産業を興し、このような成果を上げたのであります（内橋克人、『実の技術・虚の技術』岩波書店、1999）。こういった、足が地についた技術とその価値、それによる社会の健全な発展といった考え方は我が国においても非常に重要であり、根気よく世論形成をしてゆく必要があるわけであります。

世界規模での熾烈な競争の時代に突入したということは事実でありましょう。だからといって目先の危機感と競争意識だけでは問題は解決せず、将来の調和ある発展を考えたプランを作るとともに、これを世界に訴えてゆく必要があるわけであります。1997年の秋に京都で行われた地球温暖化防止京都会議（COP3）における二酸化炭素排出量の総量規制の取り決めはその一つの例であります。こういったことを実現してゆくためには、技術的にも社会的にもまた政治的にも相互関係性を密にしながら、お互いに協力しなければなりません。

いずれにしても、物事の解釈と判断の背後には、何が正しいことであるかについての鋭い感覚の存在が必要であり、行動においては何が善であるかについての分別がなければなりません。

日本は今日世界第二の経済大国であると言われておりますが、国際社会においてまだまだ一人前であるとは思われません。それは人格に対応する国の人格、国の品格において、日本はまだ自分の立場というものをしっかりと持ち、世界各国に尊敬されながらお互いに対等に話し合っただけの見識をもっていないということでもあります。あまりにも経済的なことだけで、しかも近視眼的であって、世界各国が自国の福祉と発展のために独自の立場から秘術を尽くしている中で、あまりにも単純で考えのない事ばかりをやっているとしか見られていないようにも思われます。

今日修士課程を修了した皆さんは、将来の日本の中心となって活躍される人達であります。諸君はここに述べて来ましたようなことをよく考え、自分の考え方を明確にし、適切に発言し行動してゆくことによって日本の社会をよくし、国際的にも尊敬をかちえる国にしてゆくことが期待されているのであります。

欧米人は自分の考えたことを話しますが、日本人は非常に多く、人から聞いたこと、自分の知っていることを得意になって話します。しかしこれからの国際社会において、はっきりした存在感を与え、尊敬される人や国となるためには、我々は自分の立場、日本の立場というものをふまえて、よく考え、客觀的にも妥当であるという自分の考え方をもち、これを説得力のある明確な言葉で述べる必要があります。

諸君はこういったこと、即ち、物の見方、考え方、そしてその表明の仕方ということ、特に修士課程の2年間で訓練してきたことと思います。今後は未知の事に出会い、何らかの決断をしなければならないということの連続となるでしょうが、諸君の学識と考える力とによって、これが正しく行われなければならないではありません。困難にぶつかり、迷いが深まれば深まるほど、学問の根本にもどってよく考えることであり、諸君の京都大学での学問・研究の経験がこれをしっかりと支えるのであります。

21世紀という新しい無限の可能性を秘めた時代における諸君の活躍を期待し、これをもって諸君の門出に対するはなむけの言葉といたします。

## 博士学位授与式における総長のことば

平成11年3月23日

総長 長 尾 真

ただ今博士の学位を授与された皆様まことに改めてとうございます。ご列席の各研究科長とともに心からお慶びを申し上げます。今回は課程博士342名、論文博士102名でありましたが、平成10年度全体では課程博士492名、論文博士285名、合計777名の方々に博士の学位を授与いたしました。

皆さんは、京都大学という最高の学府で最高の学問を身につけ、独自の研究成果をあげられた結果、こうして晴れの博士学位の授与を受けられたわけがあります。皆さんはこれからも学問研究を続けてゆかれるでしょう。学問を究めるということはこれからであります。これからもたゆまない努力を続けてくださるようお願いいたします。これから社会にで

てゆく皆さんの場合も、自分の専門性を生かして活躍してゆくことになるでしょう。いずれの道をとる場合も、未知の事柄に出会い、これを何らかの形で解決してゆくことが皆さんに期待されているわけがあります。

そこでもっとも大切なことは、物事を柔軟に考えるということでありましょう。孔子の言葉に「学べば即ち固ならず」というのがあります。知識の狭い人はややもすると自分の狭い考えにとらわれて、頑固になりがちであります。学問によって知見を広め、柔軟な精神状態を保つようにすべきだ、ということでもあります。

今日の学問はあまりにも細分化されすぎていま

す。狭い領域、狭い条件の範囲で、与えられた方法論でとにかく3年間で何らかの新しい成果を出すということをやった人もいたかもしれませんが、少なくともこれからは柔軟な精神でもって、広く物事を考える必要があります。またスピードが必要だからといって、難しいが正統な最善であると思われる道を選ばず、次善の道で何とか物事を取り繕ってしまうということがあるかもしれませんが、常に最善を尽くすという意志と努力を怠ってはならないと思います。手っとり早いことですませば、その場は取り繕えても、後になってそこから派生する諸々の障害を取り除くために、はるかに大きな努力や費用と時間が必要になるということはいくつあることであります。したがって、条件が許す範囲内のぎりぎりの最善を尽くすということが必要であります。

さて今日世界的にみても、社会は大衆化と技術化の道を一途に進んでいるという状況にあります。技術の発展は社会の大衆化をますます押し進め、また社会の大衆化はますます技術の進歩と大衆化を要請するという相互関係にあるのであります。

そして特に情報技術を中心とする現代先端技術の社会化によって、現代の社会機構は技術装置化されてゆき、人々の活動がこの巨大装置の機能部品化されてゆきつつあります。そしてその中に住まう人々の精神や生きる目標までもが、この巨大な技術装置に適合するように改造されていっているようにも見えます。さらに、その機能部品としての効率によって人間の精神までもが評価されてゆきつつある、ということに気づかずに、自己満足してしまう危険性さえはらんでいるのであります。こういった中で政治や経済はおろか、文化や学問、研究や教育の世界までが大衆化の影響を強く受け、その活動やその結果生みだされる価値までもが、著しい勢いで大衆の希望や好みに合わせてゆかざるをえないような風潮一

色となって行きつつあります。

こういった大衆化と技術化は大学にも押しよせ、教育と研究を飲み込んでゆこうとしております。そういった時代に大学は何ができるのか、何をしなければならないのかは、我々大学人にとって死活の問題といってよいものであります。過去の人類の遺産を後世に伝えるときにも、新しい知的創造をし、時代に貢献してゆくために尊重されるべき精神とは何か、を明らかにし、社会に対してその認識と理解を求めてゆく必要があるわけであります。

現代の精神的状況の貧困を鋭くえぐり出し、これを批判するとともに、将来のあるべき姿を描き出すことこそ現在の大学、特に独自の哲学・思想的伝統をもつ京都大学に与えられた使命であると思います。しかし、これは非常に難しい仕事であり、哲学・思想がご専門の先生方のみならず、広く大学のあらゆる学問分野の方々の意見をたたかわせ、京都大学の社会に対する使命を明らかにしてゆくことによって実現しなければならないでしょう。大学改革論議の盛んな今日、将来へむけての最善の道を選ぶべく、先に述べましたように広く深い学識と柔軟な精神とでもってこの議論をしっかりと行い、我々の存在理由を明確にしなければならないと思っております。

今日京都大学の博士学位を得られました皆さんも、学問とは何か、社会と学問との関係、大学のあるべき姿について、これからもよく考えていただき、ともすれば日常性の中に埋没しそうになる自分の精神を励まし、これからのあるべき日本、あるべき社会を考え、それに向かって努力する際の糧にしていだきたいと存じます。大学の持つ意味、学問の持つ力はそういうところにもあるわけであります。

皆さんのこれからのご活躍を念じながら、今日の良き日のお祝いの言葉といたします。

## 大学の動き

### 平成10年度卒業式

平成11年3月24日（水）午前10時から，総合体育館において名誉教授をはじめ部局長等の出席のもとに平成10年度卒業式が挙行された。京都大学交響楽団による式典曲奏楽，京都大学合唱団による学歌斉唱の後，総長から，各学部代表に学位記が授与された。

続いて，総長の式辞があり，最後に「蛍の光」を全員が合唱して，午前10時55分に終了した。

本年度の新学士は，総合人間学部126名，文学部193名，教育学部67名，法学部384名，経済学部206名，理学部304名，医学部109名，薬学部86名，工学部934名，農学部300名の計2,709名であった。

### 平成10年度修士学位授与式

平成11年3月23日（火）午前10時から，総合体育館において名誉教授をはじめ研究科長等の出席のもとに平成10年度修士学位授与式が挙行された。

総長から各研究科代表に，学位記が授与された後，総長の式辞があり，午前10時35分に終了した。

本年度の修士課程修了者は，文学研究科107名，

教育学研究科34名，法学研究科54名，経済学研究科64名，理学研究科280名，薬学研究科75名，工学研究科710名，農学研究科254名，人間・環境学研究科129名，エネルギー科学研究科107名の計1,814名であった。

### 博士学位授与式

平成11年3月23日（火）午後1時から，総合体育館において，総長，副学長をはじめ研究科長等の出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各専攻分野の代表20名に，学位記が授与された後，総長の式辞があり，午後1時55分終了した。

本年3月の学位授与者数は，課程博士342名，論文博士102名の計444名であった。

各研究科別の内訳は右欄のとおりである。

研 究 科	課程博士	論文博士	合計
文 学 研 究 科	17 <sup>人</sup>	11 <sup>人</sup>	28 <sup>人</sup>
教 育 学 研 究 科	2	4	6
法 学 研 究 科		1	1
経 済 学 研 究 科	12	4	16
理 学 研 究 科	94	12	106
医 学 研 究 科	69	8	77
薬 学 研 究 科	17	4	21
工 学 研 究 科	70	35	105
農 学 研 究 科	35	20	55
人間・環境学研究科	23		23
エネルギー科学研究科	3	3	6



## 医療技術短期大学の動き

### 平成10年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、平成11年3月17日（水）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の出席のもとに、卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書・修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前10時45分終了した。卒業生は、看護学科70名、衛生技術学科41名、理学療法学科23名、作業療法学科18名で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20名の計172名であった。

